

おじいさんのランプ

新美 南吉
にい み なん きち

かくれんぼで、倉のすみにもぐりこんだ東一君とういちくんがランプを持って出てきた。

それはめずらしい形のランプであった。八十センチぐらいの太い竹の筒つつが台になっていて、その上にちよっぴり火のともる部分がくつついていて、そしてほやは、細いガラスの筒であった。はじめてみるものにはランプとは思えないほどだった。

そこでみんなは、むかしの鉄砲てっぽうとまちがえてしまった。

「なんだア、鉄砲かア。」と鬼おにの宗八君そうはちはいった。

東一君のおじいさんも、しばらくそれがなんだかわからなかった。眼鏡めがねごしにじっとみていてから、はじめてわかったのである。

ランプであることがわかると、東一君のおじいさんはこういって子どもたちをしかりはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持ち出すか。まことに子どもというものは、だまって遊ばせておけば何を持ち出すやらわけのわからん、油断ゆだんもすきもない、ぬすつと猫ねこのようなものだ。こらこら、それはここへ持ってきて、お前たちは外へいって遊んでこい。外にいけば、電信柱でもなんでも遊ぶものはいくらでもあるに。」

こうしてしかられると子どもははじめて、自分がよくない行ないをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持ち出した東一君はもちろんのこと、何も持ち出さなかった近所の子どもたちも、自分たちみんなでわるいことをしたような顔をして、すすごと外の道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりをふき立ててすぎ、のろのろと牛車を通ったあとを、白い蝶ちようがいそがしそうに通ってゆくこともあった。なるほど電信柱があっちこっちに立っている。しかし子どもたちは電信柱なんかで遊びはしなかった。おとなが、こうして遊ぶといったことを、いわれたままに遊ぶというのはなんとなくばかっているように子どもには思えるのである。

そこで子どもたちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことはわすれてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰ってきた。奥おくの居間いまのすみに、あのランプがおいてあった。しかし、ランプのこゝとを何かいうと、またおじいさんおじいさんにがみがみいわれるかも知れないので、だまっていた。

夕ご飯のあとの退屈たいくつな時間がきた。東一君はたんすにもたれて、ひき出しのかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげをはやした農学校の先生が『大根栽培だいこんさいばいの理論りろんと実際じっさい』というような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じっとみていたりした。

そういうことにもあくと、また奥の居間にもどってきて、おじいさんがいないのをみすまして、ランプのそばへにじりより、そのほやははずしてみたり、五銭はくどうか白銅貨はくどうかほどのねじをまわして、ランプのしんを出したりひっこめたりしていた。

すこしいっしょうけんめいになっていじくつていると、またおじいさんにみつかつてしまった。けれどこんどはおじいさんはしからなかった。ねえやにお茶をいいつけておいて、すっぽんと煙管筒きせるづつをぬきながら、こういった。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだわすれておったが、きょう東坊が倉のすみから持ち出してきたので、またむかしのことを思い出したよ。こうおじいさんみたいに年をとると、ランプでもなんでもむかしのものに出合うのがとてもうれしいもんだ。」

東一君はぼかんとしておじいさんの顔をみていた。おじいさんはがみがみとしかりつけたから、おこつていたのかと思つたら、むかしのランプにあうことができて喜んでいたのである。「ひとつむかしの話をしてやるから、ここへきてすわれ。」

とおじいさんがいった。東一君は話がすきだから、いわれるままにおじいさんの前へいってすわったが、なんだかお説教をされるときのようで、いごちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとって聞くことにした。

つまり、寝そべって両足をうしろへ立てて、ときどき足のうらをうちあわせる芸当をしたのである。

おじいさんの話というのはつぎのようであった。

いまから五十年ぐらいまえ、ちようど日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田の村に巳之助という十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚のものとしてひとりもない、まったくのみなしごであった。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守をしたり、米をついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることならなんでもして、村においてもらっていた。

けれども巳之助は、こうして村の人びとのお世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであった。子守をしたり、米をついたりして一生を送るとするなら、男とうまれたかいないと、つねづね思っていた。

男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、ご飯をたべてゆくのがやつとのことであつた。本一冊さつ買うお金もなかつたし、またたといお金があつて本を買つたとしても、読むひまがなかつた。

身を立てるのによいきっかけがないものかと、巳之助はこころひそかに待っていた。

するとある夏の日のひるさがり、巳之助は人力車じんりきしゃの先綱さきづなをたのまれた。

そのころ岩滑新田には、いつも二三人の人力ひきがいた。潮湯治しおとうじ(海水浴のこと)に名古屋からくる客は、たいてい汽車で半田はんたまできて、半田から知多半島ちたはんとう西海岸の大野や新舞子おおの しんまいこまで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたっていたからである。

人力車は人がひくのだからあまりはやくは走らない。それに、岩滑新田と大野のあいだには峠とうげが一つあるか

ら、よけい時間がかかる。おまけにそのころの人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪かなわだったのである。

そこで、急ぎの客は、賃銀ちんぎんを倍出して、ふたりの人力ひきにひいてもらうのであつた。巳之助に先綱ひきをたのんだのも、急ぎの避暑客ひしよきやくであつた。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱つなを肩かたにかついで、夏の入陽いりひのじりじり照りつける道を、えいやえいやと走つた。なれないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しさなど気にしなかつた。好奇心でいっぱいだった。なぜなら巳之助は、ものごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人びとが住んでいるか知らなかつたからである。

日がくれて青い夕闇ゆうやみの中を人びとがほの白くあちこちするころ、人力車は大野の町にはいった。

巳之助はその町でいろいろな物をはじめてみた。軒のきをならべてつづいている大きい商店が、第一、巳之助

にはめずらしかった。巳之助の村にはあきないやとては一軒いっけんしかなかった。駄菓子だがし、わらじ、糸くりの道具、膏薬こうやく、貝殻かいがらにはいった目薬、そのほか村で使うたいいていの物を売っている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしている、花のように明るいガラスのランプであった。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かった。まっくらな家の中を、人びとは盲めくらのように手でさぐりながら、水がめや、石臼いしうすや大黒柱をさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りよめいのとき持ってきたあんどんを使うのであった。あんどんは紙を四方にはりめぐらした中に、油のはいった皿ひらがあつて、その皿のふちにのぞいている燈心とうしんに、桜さくらのつぼみぐらいの小さいほのおがともると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、付近はすこし明るくなったのである。しかし

どんなあんどんにしろ、巳之助が大野の町でみたランプの明るさにはとてもおよばなかった。

それにランプは、そのころとしてはまだめずらしいガラスでできていた。すすけたり、やぶれたりしやすい紙でできているあんどんより、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城りゅうぐうじょうかなにかのように明るく感じられた。もう巳之助は自分の村へ帰りたくないと思つた。人間はだれでも明るいとところから暗いとところに帰るのをこのまないのである。

巳之助は駄賃だちんの十五銭をもらうと、人力車ともわかれてしまつて、お酒にでもよつたように、波の音のたえまないこの海辺の町を、めずらしい商店をのぞき、美しく明るいランプにみとれて、さまよつていた。

呉服屋こふくやでは、番頭ばんとうさんが、椿つばきの花を大きくそめ出した反物たんものを、ランプの光の下にひろげて客にみせていた。

穀屋こくやでは、小僧こぞうさんがランプの下であずきのわるいのを一粒つぶずつひろい出していた。またある家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻をちらしておはじきをしていた。またある店ではこまかいたまに糸を通して数珠じゆずをつくっていた。ランプの青やかな光のもとでは、人びとのこうした生活も、物語か幻燈げんとうの世界でのように美しくなつかしくみえた。

巳之助はいままでなんども、「文明開化で世の中がひらけた。」ということを書いていたが、いま始めて文明開化ということがわかったような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、さまざまなランプをたくさんつるしてある店のまえにきた。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五銭をにぎりしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいっていった。

「ああいうものを売つとくれや。」

と巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプと
いうことばを知らなかったのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きいつりランプを
はずしてきたが、それは十五銭では買えなかった。

「まけとくれや。」
と巳之助はいった。

「そうはまからん。」

と店の人は答えた。

「卸値おろしねで売つとくれや。」

巳之助は村の雑貨屋ざっかやへ、作ったわらじを買ってもらいによくいったので、物には卸値と小売値があつて、卸値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作った瓢箪型ひょうたんがたのわらじを卸値の一銭五厘りんで買いつつて、人力ひきたちに小売値の二銭五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、みも知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びつくりしてまじまじと巳之助の顔をみた。そしていった。

「卸値で売って、そりや相手がランプを売る家なら卸値で売ってあげてもいいが、ひとりひとりのお客に卸値で売るわけにはいかんな。」

「ランプ屋なら卸値で売ってくれるだのイ？」

「ああ。」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸値で売ってくれ。」

店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋？ はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だからたのむに、今日きょうは一つだけ卸値で売ってくれや。こんどくるときや、たくさん、いっぺんに買うで。」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣しんけんなように動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値でこいつを売ってやろう。ほんとは卸値でもこのランプは十五銭じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。まけてやろう。そのかわりしっかりしようばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ。」

といて、ランプを巳之助にわたした。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついでにちようちんがわりにそのランプをともし、村へむかった。

藪やぶや松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもうこわくはなかった。花のように明るいランプをさげていたからである。

巳之助の胸むねの中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化におくれた自分の暗い村に、このすば

らしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明るくしてやろうという希望のランプが――

巳之助の新しいしようばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓ひやくしやうたちはなんでも新しいものを信用しないからである。

そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒いっけんきりのあきないやへそのランプを持って行って、ただでかしてあげるからしばらくこれを使ってくれとたのんだ。

雑貨屋のばあさんは、しぶしぶ承知しょうちして、店の天井てんじやうに釘くぎを打ってランプをつるし、その晩ばんからともした。

五日ほどたって、巳之助がわらじを買ってもらいにいくと、雑貨屋のばあさんはこにこしながら、こりやたいへん便利で明るうて、夜でもお客がようきてくれるし、釣銭つりせんをまちがえることもないので、気に入ったから買いましょう、といった。その上、ランプのよ

いことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあつたことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋のばあさんからランプの代とわらじの代をうけると、すぐその足で、走るようにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、たりにないところはかしてもらい、三つのランプを買ってきて、注文した人に売った。

これから巳之助のしようばいははやってきた。はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいったが、すこし金がたまると、注文はなくてもたくさん買いこんできた。

そしていまはもう、よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしようばいだけにうちこんだ。ものほし台のようなく、ついた車をしたてて、それにランプやほやなどをいっぱいつるし、

ガラスのふれあう涼しい音をさせながら、巳之助は自分の村や付近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金ももうかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。いままで暗かった家に、だんだん巳之助の売ったランプがともってゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化の明るい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう青年になっていた。それまでは自分の家としてはなく、区長さんのところの軒のかたむいた納屋やに住ませてもらっていたのだが、小金がたまったので、自分の家もつくった。すると世話してくれる人があつたのでお嫁よめさんももらった。

あるとき、よその村でランプの宣伝せんでんをしておいて、「ランプの下なら畳たたみの上に新聞をおいて読むことができるのイ。」と区長さんに以前きいていたことをいうと、お客さんのひとりが「ほんとカン？」とききかえしたので、嘘うそのきらいな巳之助は、自分でためして

みる気になり、区長さんのところから古新聞をもらってきて、ランプの下にひろげた。

やはり区長さんのいわれたことはほんとうであった。新聞のこまかい字がランプの光で一つ一つはつきりみえた。「わしは嘘をいってしょうばいをしたことにはならない。」と巳之助はひとりごとをいった。しかし巳之助は、字がランプの光ではつきりみえてもなんにもならなかった。字を読むことができなかったからである。

「ランプで物はよくみえるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ。」
そういつて巳之助は、それから毎晩まいばん区長さんのところへ字を教えてもらいにいった。

熱心だったので一年もすると、巳之助は尋常科じんじょうかを卒業した村人のだれにもまけないくらい読めるようになった。

そして巳之助は書物を読むことをおぼえた。

巳之助はもう、男ざかりのおとなであった。家には子どもがふたりあった。「自分もこれでどうやらひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるというところまではいっていないけれども。」と、ときどき思ってみて、そのつど心に満足を覚えるのであった。

さてある日、巳之助がランプのしんをしいれに大野の町へやってくると、五六人の人夫が道のはたに穴あなをほり、太い長い柱を立てているのをみた。その柱の上の方には腕うでのような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物せともののだるまさんのようなものがいくつかついていた。こんな奇妙きみょうなものを道のわきに立てて何にするのだらう、と思ひながらすこし先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀すずめが腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらいあいだをおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんをほしている人いきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいもうんが今度ひけるだけな。そいでもう、ランプはいらんようになるだけな。」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。ランプのかわりになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいあるまい。あかりなら、家の中にもせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたつて、巳之助がまた大野へいくと、このあいだ立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱つなのようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのっているだるまさんの頭をいまきしてつぎの柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭をいま

きしてつぎの柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよくみると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のところであつた。家の軒端のきばにつながれているのであつた。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかり、がともるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀すずめや燕つばめのええ休み場というもんよ。」

と巳之助がひとりであざわらいながら、知り合いの甘酒屋ざけやにはいつてゆくと、いつも土間のまん中の飯台はんたいの上につるしてあつた大きなランプが、横の壁かべのあたりにとりかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこうのランプが、丈夫じょうぶそうな綱てんじょうで天井からぶらさげられてあつた。

「なんだやい、変なものをつるしたじゃねえか。あのランプはどこかわるくでもなつたかやい。」

と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マツチはいらぬし、なかなか便利なもんだ。」

と答えた。

「へッ、へんで、これんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店もなんだかまがぬけてしまった。客もへるだろうよ。」

甘酒屋は、相手がランプ売りであることに気がついたので、電燈の便利なことはもういわなかつた。

「なア、甘酒屋のとツつあん。みなよ、あの天井のとこを。ながねんのランプのすすであそこだけ真黒になつとるに。ランプはもうあそこにいついてしまったんだ。いまになつて電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ。」

こんなふうには之助はランプの肩をもって、電燈のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩ばんになって、だれもマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明るくなったので、之助はびっくりした。あまり明るいので、之助は思わずうしろをふりむいてみたほどだった。

「之さん、これが電気だよ。」

之助は歯をくいしばって、ながいあいだ電燈をみつめていた。かたきでもにらんでいるようなおつきであった。あまりみつめていて眼めのたまがいたくなかったほどだった。

「之さん、そういつちやなんだが、とてもランプでたちうちはできないよ。ちよつと外へくびを出して町通りをみてごらんよ。」

之助はむつつりと入口の障子しょうじをあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じよう

に明るい電燈がともっていた。光は家の中にあまって、道の上にまでこぼれ出ていた。ランプをみなれていた之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。之助は、くやしさに肩かたでいきをしなから、これも長いあいだながめていた。

ランプの、てごわいかたきが出てきたわい、と思った。いぜんには文明開化ということをよくいていた。之助だったけれど、電燈がランプよりいちだん進んだ文明開化の利器であることはわからなかった。りこうな人でも、自分が職しやくを失うかどうかというようなきには、物事の判断はんだんが正しくつかなくなるものがあるものだ。

その日から之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになることを、心ひそかにおそれていた。電燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁かべのすみにつるすか、倉の二階

にでもしまいこんでしまうだろう。ランプ屋のしょうばいはいらなくなるだろう。

だが、ランプでさえ村へはいつてくるにはかなりめんどろだったから、電燈となつては村人たちはこわがつて、なかなかよせつけることではあるまい、と巳之助は、一方では安心もしていた。

しかしまもなく、「こんどの村会で、村に電燈をひくかどうかをきめるだけな。」といううわさをきいたときには、巳之助は脳天のうてんに一撃いちげきをくらつたような気がした。強敵きやうてきいよいよござんなれ、と思つた。

そこで巳之助はだまつてはいられなかつた。村の人のあいに、電燈反対の意見をまくしたてた。

「電気というものは、長い線で山の奥おくからひっぱつてくるもんだでのイ、その線をば夜中に狐きつねや狸たぬきがつたつてきて、この近たはたぺんの田畠たはたをあらすことはうけあいだね。」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分のなれたしよばいを守るためにいのであつた。それをいうとき何かうしろめたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田の村にも電燈をひくことにきまつたと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらつたような気がした。こうたびたび一撃をくらつてはたまらない、頭がどうかなつてしまふ、と思つた。

その通りであつた。頭がどうかなつてしまつた。村会むらひのあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひつかぶつてねていた。そのあいに頭の調子がくるつてしまつたのだ。

巳之助はだれかをうらみたくてたまらなかつた。そこで村会で議長ぎぎの役をした区長くわうちやうさんをうらむことにした。そして区長くわうちやうさんをうらまねばならぬわけをいろいろ考かんがへた。へいぜいは頭のよい人でも、しよばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断

をうしなうものである。とんでもないうらみをいまく
よくなるものである。

菜の花ばたの、あたたかい月夜であった。どこかの
村で春祭りのしたくに打つ太鼓たいこがとほとほと聞こえて
きた。

巳之助は道を通ってゆかなかった。みぞの中をいた
ちのように身をかがめて走ったり、藪やぶの中をすて犬の
ようにかきわけたりしていった。他人にみられたくな
いとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長いあいだやつかいになっていた
ので、よくその様子ようすはわかっていた。火をつけるにい
ちばん都合のよいのは藁屋根わらやねの牛小屋であることは、
もう家を出るときから考えていた。

母屋おもやはもうひっそりねしずまっていた。牛小屋もし
ずかだった。しずかだといって、牛はねむっているか
めざめているかわかったもんじやない。牛は起きてい

てもねていてもしずかなものだから。もっとも牛が眼
をさましていたって、火をつけるにはいつこうさしつ
かえないわけだけれども。

巳之助はマッチのかわりに、マッチがまだなかつた
じぶん使われていた火打ひうちの道具を持ってきた。家を出
るとき、かまどのあたりでマッチをさがしたが、どう
したわけかなかなかみつからないので、手にあたって
のをさいわい、火打の道具を持ってきたのだった。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、
ほくちがしめっているのか、ちつとももえあがらない
のであった。巳之助は火打というものは、あまり便利
なものではないと思った。火が出ないくせにカチカチ
と大きな音ばかりして、これではねている人が眼をさ
ましてしまうのである。

「ちえッ」と巳之助は舌打ちしたうしていった。「マッチを
持ってきてくりやよかった。こげな火打みてえな古くせえ
もなア、いざというときにまにあわねえだなア。」

そういつてしまつて巳之助は、ふと自分のことばをききとがめた。

「古くせえもなア、いざというときまにあわねえ、：古くせえもなアまにあわねえ……」

ちようど月が出て空が明るくなるように、巳之助の頭がこのことばをきつけににして明るく晴れてきた。

巳之助は、いまになつて、自分のまちがつていたことがはつきりわかつた。——ランプはもはや古い道具になつたのである。電燈という新しいいっそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしようばいが失われるからとて、世の中の進むのにじゃましようとしたり、なんのうらみもない人をうらんで火をつけようとしたのは、男としてなんといい見苦しいぎまであつたことか。世の中が進んで、古いしようばいがい

らなくなれば、男らしく、すっぱりそのしようばいはすてて、世の中のためになる新しいしようばいにかわろうじゃないか。——

巳之助はすぐ家へとつてかえした。

そしてそれからどうしたか。

ねているおかみさんを起こして、いま家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜ふけに何をするつもりか巳之助にきいたが、巳之助は自分がこれからしようとしていることをきかせれば、おかみさんがとめるにきまつているので、だまつていた。

ランプは大小さまざまのがみなで五十ぐらいあつた。それにみな石油をついだ。そしていつもあきないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こんどはマツチをわすれずに持つて。

道が西の峠にさしかかるあたりに、半田池はんだいけという大きな池がある。春のことといつぱいたたえた水が、月

の下で銀盤ぎんばんのようにけぶり光っていた。池の岸にはは
んの木や柳やなぎが、水の中をのぞくようになかつこうで立っ
ていた。

巳之助は人気ひとけのないここをえらんできた。

さて巳之助はどうするのだろうか。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、
それを池のふちの木の枝えだにつるした。小さいのも大き
いのも、とりまぜて、木にいつぱいつるした。一本の
木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。
こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるし
た。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろ
がず、もえ、あたりは昼のように明るくなった。あか
りをしたってよってきた魚が、水の中にきらりきらり
とナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助はひとりでいった。しかし立ちさりかねて、
ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴すずなりになつ
た木をみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月な
じんできたランプ。

「わしのしょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側おうかんの往還おうかんにきた。まだ
ランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五
十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十
いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちど
まって巳之助は、そこでもながくみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ
ひろった。そして、いちばん大きくともっているラン
プにねらいをさだめて、力いっぱい投げた。パリーン
と音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世はすぎた。世の中は進んだ。」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころをひろった。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった。」

三番目のランプをわったとき、巳之助はなぜか涙がうかんできて、もうランプにねらいをさだめることができなかつた。

こうして巳之助はいままでのようにばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になつたのである。

× × ×

「巳之助さんはいまでもまだ本屋をしている。もっともいまじゃだいぶ年とつたので、息子が店はやっているがね。」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、さめたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔を

みた。いつのまにか東一君はおじいさんのまえにすりなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、のこりの四十七のランプはどうした？」と東一君はきいた。

「知らん。つぎの日、旅の人がみつけて持ってつたかも知れない。」

「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになつちやつた？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけがのこつていた。」

とおじいさんは、ひるま東一君が持ち出したランプをみていった。

「損しちゃつたね。四十七もだれかに持ってかれちゃつて。」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。いまから考えると、何もあんなことをせんでもよかったとわしも思う。岩滑新田に電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新田の南にある深谷ふかだになんという小さい村じゃ、まだいまでもランプを使っているし、ほかにも、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あったのさ。しかし何しろわしもあのころは元気がよかったんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱとやってしまったんだ。」

「ばかしちやったね。」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、ばかしちやった。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝の上でぎゅツとにぎりしめていった。

「わしのやり方はすこしばかだったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしのいいたいのはこうさ、

日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったなら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがはやっていたむかしの方がよかつたといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことはけつしてしないということだ。」

東一君はだまって、ながいあいだおじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかったんだねえ。」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプをみた。

「おじいさんのランプ」

新装版『新美南吉童話集2 おじいさんのランプ』(2012年・大日本図書株式会社)所収の「おじいさんのランプ」をもとに一部、漢字表記とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。(TEL:0569-26-4888)